2023年2月1日　アクセス　（1976年11月10日第三種郵便物認可）　第553号

地方小出版 情報誌 アクセス

毎月1回　1日発行
購読料　定価150円（本体136円）
年間1,500円（税込み）
振替　00120-0-19017

発行所　㈱地方・小出版流通センター　〒162-0836　東京都新宿区南町20
編集　アクセス編集委員会　TEL.03-3260-0355　FAX.03-3235-6182

渡辺京二さん追悼 ――///☆

言葉に生き、言葉に殉じた人

文／弦書房代表・小野静男

見事な潔さ

2022年12月25日、渡辺京二さんが急逝した。長女の梨佐さんが朝食ができたと呼びに行ったときにはすでに亡くなっていたという。前日24日の夜には日記をつけて床についたというから、まさに大往生である。

生前、ご本人はよく冗談のように「ぼくは頓死するような気がするね」と言っていた。いわゆる突然死である。そしてその言葉どおりに「もうひとつのこの世」へと旅立った。だが、これは私の想像であるが、渡辺さんは翌朝（25日の朝）も普段どおりに起床するつもりでいたはずである。現在、熊本日日新聞に週1回（金曜日）の連載「小さきものの近代」を続行中で、2日後の27日（火曜日）にその担当記者へ30日（金曜日）に掲載予定（第92回）の校正を渡す準備をしていたからである。担当記者によれば、その折、先行して執筆ずみの136回分以降の原稿も受け取ることにしていたという。その原稿の束が、机の上に置かれているのを、25日に駆けつけたとき、目にしている。この連載のうち第64回までは第1巻として昨年7月に小社より刊行されている。

ふつう、このような長期連載は、数回先までは書いておくものだが、半年以上先まで書き進めている力業は驚異というしかない。「ぼくはもう（92歳だから）いつ死ぬかわからんのだから出来るだけ書き進めておかないと」という意志の強さだけではできない仕事である。その強さはどこから来るのか。

『小さきものの近代1』渡辺京二著／弦書房刊／定価3300円（税込）／ISBN978-4-86329-248-2

書くこと生きること

私の手もとに「アンブロシア」（41号、2015年11月10日発行）がある。詩とエッセイを中心とした同人誌で、渡辺さんのエッセイ「書くこと生きること」が収録されている。その中に、この人の原点を創った発言がいくつかある。「言葉の修練とは、読むこと、書くこと、そして辞書を引くことです。私は沢山の素晴らしい書物を読んできました。だから書くことができるのです」「問題は言葉によって自分を生かせるかどうかで、言葉に生きるしかないものは、一生そうやっていくだけの話です。これは有名になるとか、それでメシが喰えるとかとは一切関係がありません。そしてそういうふうに一生書いていくことを引き受けるのであれば、それこそ勉強が必要だし、習慣が必要です。（中略）だとすれば一生かかっても時間は足りない訳で、持続は当たり前になります」。あのいつもの鋭い眼光で、背中をこずかれたような衝撃を受ける発言である。

この「一生書いていくことを引き受ける」という発想（＝覚悟）は、あの水俣病闘争を精神的に支えた行動力と同じ次元であることに気づかされる。水俣病患者たちの苦しみを単なる同情ではなく、わがこととして引き受ける覚悟がなければチッソ本社前での座り込みや厚生省（当時）への突入行動など、あそこまでの「闘争」は形成されなかったと思う。そしてこの闘争行動で、渡辺さんの突出した考え方が、1990年12月の真宗寺（熊本市健軍、渡辺さんの通夜・葬儀もここで催された）での講演「水俣から訴えられたこと」で開示されている。「世界史で大衆自身が担う闘争っていうのは……この近代社会でですね、これはないんです。……ところが水俣ではですね、それがね、見られるんじゃないかって感じがしたんですねえ。……それで僕らはですね、一切患者の言うとおりすると、俺たちの指導なんか絶対しない。……やっぱり川本輝夫さんとか出てきてですね、これまでの反体制運動というものにあった概念を超えるような根源的な情念っていうものを持ってるんですね。心情の質で勝負できるものをね」。この講演は『死民と日常――私の水俣病闘争』（小社刊、2017年）に収録されたが、1969年から1973年までの時代のうねりのような波動が伝わってくる。あの当時、市民運動が流行り、反体制運動とはこうあるべきだという観念論で患者さんらを指導しようとした運動家が多い中で、渡辺さんは支援する裏方に徹した。外部から来たひとりのリーダーが集団を先導す

る型にはまった運動は、頭を失った時点で終ってしまうことを当初から知っていたからである。

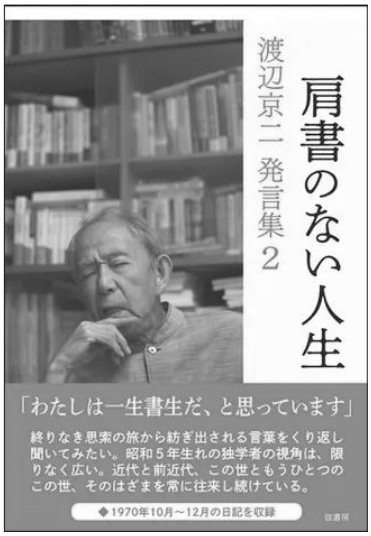
〈渡辺京二〉という幻像

渡辺京二という人の肩書は何なのか。それを具体的に意識し始めたのは1990年4月に、東京神保町にある日本エディタースクールで出版のことを学び始めた頃である。ここの講師の方から、熊本に渡辺京二という高名な評論家がいる、そしてその著書を積極的に出版している出版元が、葦書房だということを教えていただいた。〈渡辺京二〉という名前を中心に▷筑豊炭鉱・山本作兵衛、上野英信▷水俣・石牟礼道子、谷川健一、谷川雁▷天草・かくれキリシタン、捕鯨▷博多・夢野久作、頭山満、筑前玄洋社▷熊本・宮崎兄弟、神風連▷満洲・満鉄調査部、などが刊行物として並び、そのどのテーマにも渡辺さんは関わっているようだった。

9月に葦書房で働き始めてから、渡辺京二という名前は、常に多方面の人々から口をついて出てくる。研究者、作家、市民運動家、芸術家、詩人、そして一般読書人など、それぞれが自身の生き方考え方の支柱として渡辺さんの思想をとらえている。いったいこの作家は何者なのか。葦書房の書棚でまず最初に手にとった本は『小さきものの死』（1975年刊、1961年「炎の眼」初出、2013年弦書房版『万象の訪れ』に収録）だった。この本の巻頭に収録されている表題作は、刊行から50年近く経った今もその文章は緊張感に満ちている。日本（世界）近代史を研究考察するうえで、この実体験に基づく思索の深さは追体験しておかねばならないと思う。「願わくは、われわれがいかなる理不尽な抹殺の運命に襲われても、それの徹底的な否認、それとの休みのない戦いによってその理不尽さを超えたいものだ」（「小さきものの死」から）という思いは、渡辺さんの優しさと透徹した洞察力が同居する根幹を成している。

残念ながら葦書房時代に、渡辺さんと直接お会いしたのは3度しかない。最初は、1990年12月の忘年会の席で、確か菊畑茂久馬氏（画家、故人）も同席しておられ、この人があの「渡辺京二」か、という緊張感で何を話されたのか覚えていない。2度めは1992年に創業者の久本三多社長を葦書房まで訪ねて来られたとき、3度めは1994年、その久本社長の葬儀の会場でごく短い会話をしたときであった。その後、三原浩良氏（当時毎日新聞社特別論説委員、水俣病を告発する会会員）に社長を引き受けてもらい、1996年に水俣病研究会編『水俣病事件資料集』（全2巻）という大冊の刊行が実現した。この編集作業は難行したが、その作業中でも必ず、「あのとき渡辺京二さんはこう言った」「昭和45年の渡辺さんの発言の意味が未だによくわからないんだよな」といったふうに会話の中に名前があがってくる。同じ頃、『宮崎兄弟伝・第5巻』を編集作業中で、著者の上村希美雄氏（故人）は「渡辺さんに、ああたは民蔵にしても滔天にしても何もかも書きすぎる、と批判されました」と内容をめぐって何度か渡辺さんに相談していることを明かしてくださった。その厳しい出版姿勢を間近で経験したのは、1998年に『逝きし世の面影』刊行直前の出来事である。当時の社長三原浩良氏が電話で、本文中の「ある表現」をめぐってごく簡単なやりとりをしていた折、かつての水俣病闘争期の討論とも重なって、延々と一時間にわたり叱責を受けていた。そのすぐ隣の席で断片的なやりとりを聞いていた私は言いようのない緊張感に襲われたのを今も忘れられない。電話のあと、三原氏は憔悴しきっていた。だから、私の中で渡辺京二という幻像がふくらんでいったのである。

『江戸という幻景』渡辺京二著／弦書房刊／定価2640円（税込）／ISBN4-902116-21-9



『肩書のない人生』渡辺京二著／弦書房刊／定価2200円（税込）／ISBN978-4-86329-237-6

謦咳に接して15年

さまざまな経緯があって、2002年12月に弦書房を立ちあげた。改めて代表を三原氏に引き受けてもらい、先述の渡辺さんとの厳しいやりとりを乗り越えて『江戸という幻景』を2004年に刊行できた意義は大きい。『逝きし世の面影』と姉妹篇になっているからである。複雑な事情もあって、『逝きし世の面影』は平凡社に移されたが、この『江戸という幻景』は幸い版を重ねて来た。

2008年夏あたりから私が弦書房の代表を引き継ぐことになり、必然的に渡辺さんのご自宅をお訪ねする機会が巡って来たのである。それは〈幻像〉を〈実像〉にもどすための対面でもあった。2008年12月に最初にお訪ねするにあたって幸いにも『江戸という幻景』の増刷版を持参することができた。この本をきっかけにして、かつての葦書房のこと、久本三多氏との思い出、水俣病闘争を巡るエピソード、大好きなコーヒーの話、ハリウッド映画や同い歳のC・イーストウッドの魅力、河合塾講師時代の話などともかく話題は

多方面に広がった。以来、渡辺さんと直接「対話をする時間」を定期的に作るようにしたのである。この時間の中には、弦書房で刊行することになった渡辺さんと石牟礼道子さんの著書の校正作業なども含まれているが、ともかく渡辺さんにお会いする時間を重ねるにつれて、遠い幻像が厳しくも柔和な実像へと変貌した。

2018年の秋だったか、お話の中で明恵上人の生き方に言及されたことがあった。鎌倉初期、北条泰時に御成敗式目を示唆したといわれる高僧であるが、彼は「何者でもなく生きよ」と説いたことでも知られている。渡辺さんはまさにこの明恵のように何者でもなく生きた人だった。渡辺さんの実像に近づくほど、そう感じるようになったのである。肩書の付けようのないほど多様な功績を残された人だが、やはり「石牟礼道子資料保存会」の結成は大きな功績ではないか。石牟礼道子という天才を発見したこの巨大な才の塊のような人は、最期の仕事「小さきものの近代」連載の、道半ばで斃れた。最期の夜まで言葉と激闘して逝ったその潔い姿を見て、長女の梨佐さんは「父は戦死したように思います」と通夜の日、私に語った。「私が死んだら、遺された原稿は必ず本にしてくださいよ」。その声に必ず応えねばならない。

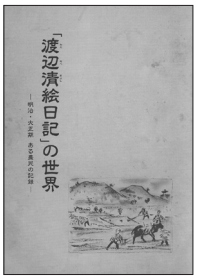
＊

（おの　しずお／弦書房代表）

新刊ダイジェスト

表示されている値段は本体価格となっております。ご購入には別途、消費税がかかります。

『「渡辺清絵日記」の世界　明治・大正期　ある農民の記録』●中野英男 編著

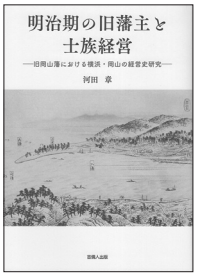


1892（明治25）年に栃木県塩谷郡熱田村（氏家町を経て現さくらし市）で農家の長男に生まれた渡辺清は、尋常高等小学校高等科を終えると、14歳で家業に就く。その時、農民として生きる覚悟を示すかのように、ノートの巻頭に「仕事日記初メ」と大書し、以後日々の農事と生活、地域社会の様子を事細かに絵日記に残した。それは1924（大正13）年まで続き、1964（昭和39）年に死去した後に、高等科時代の宿題と思われる『暑中休業日記帳』ほかと共に発見され、その数は35冊にもなる。近年、地元小学校の社会科副読本に取りあげられ、『氏家町史』に掲載されるなど、類例のない史料として高く評価されている。

本書はさくら市ミュージアム－荒井寛方記念館企画展「さくら市の歴史と文化　奇跡の渡辺清絵日記」（2022年11月～23年1月）の図録として発刊されたもので、地域の時代状況と清や家族の動向を背景に、農作業、農業形態・農具、共同労働、医療・衛生、年中行事、信仰、方言など、明治から大正へと大きなうねりとなって変動していく様子が、一つの物語のように解説されている。農作業は辛いものであったに違いないが、朴訥に描き記された絵日記からは、ほのぼのとした詩情が漂ってくる。そうした清の姿を解説者の中野英男氏は、柳田國男の『都市と農村』にある「勤労を快楽にする術、すなわち豊熟の歓喜」を体現するものと評する。「ホンニ楽シキ農ノ田ノ園」であり、楽しき図録である。（飯澤文夫）

◆1000円・A4判・103頁・**随想舎**・栃木・202211刊・ISBN9784887484122

『明治期の旧藩主と士族経営 －旧岡山藩における横浜・岡山の経営史研究』●河田章 著

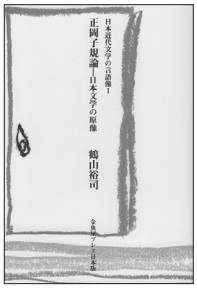


明治に入り「四民平等」がうたわれるようになると、大名は華族に、各藩士は士族と呼ばれるようになる。それまで主君から奉禄米をもらって暮らしていた武士は、版籍奉還・廃藩置県後も政府から世襲の家禄が支給されてはいたが、禄制改革が進むなか禄は削減されていく。そして明治9年（1876）の金禄公債証書発行条例をもって廃止される。世にいう秩禄処分である。この秩禄処分と地租改正によって近世の領主制は解体されたといえる。この金禄公債証書も華族と士族とでは金額に開きがあることは言うまでもない。のちに全国銀行株総額の半分近くが旧大名や旧公卿の華族が所有していたことからもそのことが窺える。

本書で取り上げられた旧岡山藩も例外ではない。池田家は莫大な資金源を家臣に貸し付けている。旧藩主による士族授産は一般的にいって、中下級士族の事業の失敗や借金で公債を手放していったといわれている。岡山藩では為替方・横浜地所の開拓・利根川の汽船運搬・遊郭などの事業を下級士族の永嶋良幸が請け負った（＜横浜＞永嶋店）。が、経営能力がないことから多額な負債を残すことになる。第二十二国立銀行もしかり。池田家藩主三名が大株主だったが、運営不振に陥り、やがては他銀行の系列に入る。どれもこれも結局は「武士の商法」といわれるように中途で頓挫してしまう。但し岡山紡績会社の社長・谷川達海の儒教的経営理念は社会公益に貢献したとの渋沢栄一の評価は記憶に留めたい。（Ｉ）

◆1800円・A5判・154頁・**吉備人出版**・岡山・202211刊・ISBN9784860696870

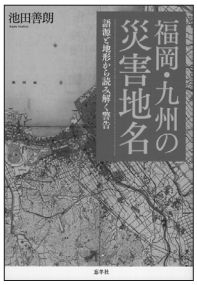
『正岡子規論　日本文学の原像』●鶴山裕司 著



国語の教科書などで私たちが知る正岡子規は、その写生理論によって俳句革新を行った俳人であり、結核が元になって寝たきりになり、『病牀六尺』などの散文を余技として書き残した、といった漠然としたものである。しかし、子規はマルチジャンル作家だったのであり、俳句だけでなく、短歌、小説にも手を染めていた。そして、各ジャンルにおいて俳句と同様、理論革新を目指した。「吾人（私）は俳句のみを重んずる者にあらざれば、他の文学を俳句の犠牲に供うるほどには俳句に忠ならず」という言葉も書き残している。著者は、子規の俳句革新の仕事ばかりではなく、短歌革新、散文革新の試みについても詳細に論じている。そして、道半ばで病に倒れた子規の仕事を継承した各ジャンルの文学者たちをも追いかけることで、子規の仕事を逆に照射しようとしている。そんな〈子規派作家〉たちの顔ぶれとしては、俳句においては子規門双璧と言われた高浜虚子と河東碧梧桐がいる。短歌では歌誌『アララギ』の誌名と小説『野菊の墓』で世に記憶されている伊藤左千夫。また小説『土』が代表作とされる長塚節。そして、散文では、言わずと知れた夏目漱石。漱石は子規の親友であり、当初は子規門俳人の一人であった。どの作家を論じても子規の写生理論との関連で書かれているが、一つ付け加えるなら、本書全体には子規理論を継承した、写生と自我意識をめぐる著者独自の俳句理論が通奏低音として流れている。この意味では著者自身〈子規派作家〉のひとりと言ってよさそうである。（T）

◆ 1819円・四六判・439頁・**金魚屋プレス日本版**・東京・202211刊・ISBN9784905221135

『福岡・九州の災害地名 －語源と地形から読み解く警告』●池田善朗 著



国土交通省が2003年に雨期を前に土砂災害等の危険個所を調査報告したところによると、急傾斜崩落危険個所は全国に33万余り、土石流危険渓流が18万余りに上ったという。日本の河川は急峻な渓谷から流れ出し平野をとおり、やがて海へはいる。この流れのなかで必ずいくつかの危険箇所に遭遇する。

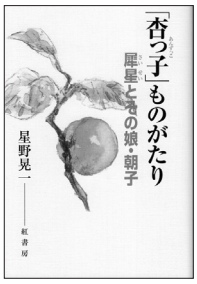
本書からいくつかの河川を捉えてみたい。福岡市西区の十郎川について、語源はぬかんでいる状態を意味するジュルイという方言である。原義は水たっぷり含んだ川底の湿地。鯰川は語源を沼・間・洲。原義は湿泥地。古賀市の花鶴川ついて、語源は崩・端・曲。原義は崩（くわ）え地の傍を曲流する川とある。宗像市の釣川について、語源は曲。原義は曲がりくねった川。八女市の矢部川の語源は岩辺。原義は岩場の地形。したがって矢部川は岩場を流れる川の意味。日向神ダム地点の両岸は岩場が連続している。佐賀県の巨勢川の語源は狭い川の意味である。熊本県の白川の語源は素(シラケル)。

原義はこの川が氾濫をおこすたびに流域がシラケた状態になる。緑川の語源は乱れ、原義はこの川は頻繁に氾濫を繰り返す川の意味である。緑川が暴れ川であることは川尻までの川沿いの地名が記憶している。例えば無田(湿地)、大町(湿地)、鯰(湿地)等がある。鹿児島市甲突川の原義は、崖の崩落したところ。最近の線状降水帯の大雨では至る所に災害危険地が現出する。

（古賀邦雄　古賀河川図書館）

◆ 2000円・四六判・173頁・**忘羊社**・福岡・202211刊・ISBN9784907902315

『「杏っ子」ものがたり －犀星とその娘・朝子』●星野晃一 著

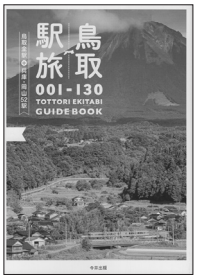


室生犀星が長女・朝子をモデルに書いた長編小説『杏つ子』。犀星晩年の作品であるが、ベストセラーとなり読売文学賞を受賞、結末は小説とは異なっているものの、映画化され、テレビドラマにもなった。しかし、小説の中の娘の名前、杏子の文字がタイトルに付されているとはいえ、自伝的要素を持つこの小説は主人公はむしろ父、平四郎とも言える。そして朝子も娘の立場から小説『赤とんぼ記』を書き、『杏つ子』に重なる事柄を描きつつ、異なる世界を作り上げている。

昨年は犀星没後60年、朝子没後20年という節目の年であり、犀星研究を専門とし、朝子と面識がある著者が『杏つ子』を主、『赤とんぼ記』を従として、その他の作品にも触れながら読み解いてゆく。『杏つ子』では私生子である平四郎の出生から苛酷な環境で成長していく過程が描かれ、戦争を経て、娘と息子の成長と、それぞれの結婚と破局までが綴られている。特に杏子の夫で定職を持たず、ものになるかもわからない原稿を書くだけの生活を続ける亮吉が平四郎が丹精込めていた庭を破壊するという行為が象徴するものへの考察は深い。一方で病で臥床を余儀なくされた妻のために庭を美しく保ちたかったという犀星。さらに犀星自身、余計な干渉などせずに離婚した娘を保護者として全面的に支えた。父に関する随筆も多い朝子も時には恋愛的感情を抱くほど父を愛していて「心の神」とまで表現している。犀星の文学への思いや室生家の風景が浮かび上がる。（Y）

◆ 3000円・四六判・349頁・**紅書房**・東京・202211刊・ISBN9784893813572

『鳥取駅旅 －鳥取全駅＋兵庫・岡山５２駅』●やまかげまなぶ 著



鳥取と言えば、松葉ガニ・温泉・砂丘といろいろ名物はありますが、忘れてはいけないのが鉄道です。「偉大なローカル線」とも呼ばれる山陰本線をはじめとして、美しい風景に満ち溢れています。そうした鳥取（と兵庫・岡山の一部）の駅にスポットライトを当てたのが本書です。

鳥取でも鉄道会社は厳しい経営を強いられており、駅とてその波を免れることはできません。田舎の駅では無人化が進み、駅舎が取り壊されて待合室だけの駅も増えていますが、それでもまだまだ素敵な駅が沢山あります。特急停車駅ながら今も大正時代の駅舎を使っているJR伯備線の根雨駅は国鉄時代を思い起こさせる渋い駅ですし、そうかと思えばJR境線の各駅には地元出身の漫画家水木しげるにちなみ、愛称として妖怪の名前が付けられています。一方第三セクターの若桜鉄道には、因幡船岡・隼・安部・八東・丹比・若桜と趣ある木造駅舎が目白押しです。そしてこれらはいずれも国の登録有形文化財として登録されています。また智頭鉄道の恋山形駅はピンク一色に塗られ今や観光名所となっていますし、宮本武蔵駅や河野原円心駅と歴史上の人物の名前を駅名にしたりもしています。両社とも小さな鉄道会社ですがあの手この手の工夫を凝らし、駅へ人に来てもらおうという心意気が感じられます。全ての駅を紹介したいくらいですが、あとは是非本書を手に取って、全編フルカラーの美しい写真とともにご堪能ください。（副隊長）

◆1800円・A５判・189頁・**今井出版**・鳥取・202211刊・ISBN9784866113128

地方小出版 流通センター　ジャンル別 新刊案内

2022年12月1日～31日
流通センター着

※各ジャンル内での出版社名は所在地の北から南の順に並んでいます。

表示されている値段は本体価格となっております。ご購入には別途、消費税がかかります。

【雑誌】

◆**Kappo** vol.121 2023年1月号 プレスアート編 298mm × 230mm 111頁 745円 プレスアート［宮城］ 978-4-503-22738-6 22/12

◆**S－style** 01 vol.697 プレスアート編 280mm × 210mm 127頁 500円 プレスアート［宮城］ 978-4-503-22748-5 23/01

◆**Sports－Car Racing** Vol.22 鈴木 英紀編 A4 113頁 3000円 Sports－Car Racing Group［茨城］ 978-4-925254-17-5 22/12

◆**GREEN REPORT** 516 2022年12月号 廣瀬 仁編 A4 191頁 2546円 地域環境ネット［埼玉］ 978-4-909864-48-2 22/12

◆**響き合う街で** No.103 2022年11月号 やどかり出版編 B5 62頁 1200円 やどかり出版［埼玉］ 978-4-503-22737-9 22/11

◆**AXIS** Vol.221 2023年1月号 上條 昌宏編 297mm × 225mm 128頁 1636円 アクシス［東京］ 978-4-503-22754-6 23/02

◆**地方史研究** 第420号 地方史研究協議会編 A5 130頁 1143円 岩田書院［東京］ 978-4-86602-870-5 22/12

◆**レコード・マネジメント** No.83 三輪 宗弘編 A4 89頁 2857円 岩田書院［東京］ 978-4-503-22750-8 22/11

◆**子どもと読書** 457号 2023年1・2月号 親子読書地域文庫全国連絡会編 A5 40頁 509円 親子読書地域文庫全国連絡会［東京］ 978-4-907376-62-8 22/12

◆**月刊終活** 268 2023年1月号 清水 明央編 A4 102頁 1500円 鎌倉新書［東京］ 978-4-503-22755-3 23/01

◆**月刊住職** No.289 2022年12月号 矢澤 澄道編 A5 183頁 1364円 興山舎［東京］ 978-4-910408-20-0 22/12

◆**月刊住職** No.290 2023年1月号 矢澤 澄道編 A5 187頁 1546円 興山舎［東京］ 978-4-910408-21-7 23/01

◆**子どもの文化** No.616 2023年1月号 片岡 輝編 A5 47頁 290円 子どもの文化研究所［東京］ 978-4-503-22753-9 23/01

◆**セセデ** vol.742 2023年1月号 朝鮮青年社編 A4 45頁 482円 朝鮮青年社［東京］ 978-4-503-22747-8 23/01

◆**東京かわら版** No.594 2023年1月号 佐藤 友美編 203mm × 110mm 174頁 636円 東京かわら版［東京］ 978-4-910085-29-6 22/12

◆**みんなの図書館** No.549 2023年1月号 図書館問題研究会編 A5 80頁 750円 図書館問題研究会［東京］ 978-4-503-22744-7 22/12

◆**パズル通信ニコリ** Vol.181 ニコリ編 257mm × 148mm 127頁 1100円 ニコリ［東京］ 978-4-89072-681-3 22/12

売行良好書

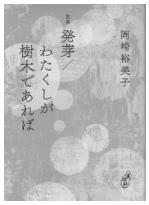
期間：2022年12月15日～2023年1月14日
※価格は本体価格表示です。別途消費税がかかります。

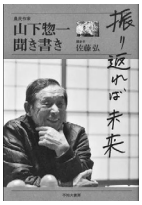
［出荷センター扱い］

(1)『小さきものの近代１』3000円・弦書房　(2)『振り返れば未来　山下惣一聞き書き』2000円・不知火書房　(3)『オールアラウンドユー』1800円・ナナロク社　(4)『ベルクソン思想の現在』1800円・書肆侃侃房　(5)『仁義ある戦い』1700円・忘羊社　(6)『英国児童文学の舞台を訪ねて』1600円・東京子ども図書館　(7)『極度の心配性で苦しむ私は、強迫性障害でした！！』1300円・燦燦舎　(8)『愛ことば』1200円・岩手日報社　(9)『アールヌーヴォー建築　建築家の自邸ＢＥＳＴ５０』1000円・リーブル出版　(10)『沖縄の身近な植物図鑑』4500円・ボーダーインク　(11)『東京の森のカフェ』1300円・書肆侃侃房　(12)『九州・沖縄の日刊地域紙』2800円・南方新社

［ジュンク堂書店池袋店　地方出版社の本―センター扱い図書］

(1)『発芽／わたくしが樹木であれば』1400円・青磁社　(2)『「新装版」対談　ヤポネシアの海辺から』2000円・弦書房　(3)『振り返れば未来　山下惣一聞き書き』2000円・不知火書房　(4)『モトムラタツヒコの読書の絵日記』1500円・書肆侃侃房　(5)『公共善エコノミー』2600円・鉱脈社　(6)『鳥取駅旅』1800円・今井出版　(7)『見る！聞く！歩く！高尾　浅川野鳥図鑑』900円・揺籃社　(8)『北のモノ コト ヒト』3600円・北海道大学出版会　(9)『なごや　街と交通の一世紀』8000円・樹林舎　(10)『アイヌからみた北海道１５０年』1600円・北海道大学出版会　(11)『ナガサキの郵便配達』1200円・スーパーエディション　(12)『出雲王国とヤマト政権』2250円・大元出版　(13)『沖縄の身近な植物図鑑』4500円・ボーダーインク　(14)『海の上の建築革命』2400円・忘羊社　(15)『極度の心配性で苦しむ私は、強迫性障害でした！！』1300円・燦燦舎





以下ホームページ等でも各種情報提供を行なっております。ご利用ください。
ＵＲＬ：http://neil.chips.jp/chihosho/　　ツイッター公式アカウント：@local_small

トピックス ―― ★★★

▼日本思想史家の渡辺京二さんが2022年12月25日に急逝されたとの報道に接し、今号のトップでは、弦書房の小野静男代表に追悼の文章を執筆していただきました。ありがとうございました。弦書房では本稿でも触れられている【小さきものの近代1】をはじめ【幻のえにし - 渡辺京二発言集】

【もうひとつのこの世 - 石牟礼道子の宇宙】【預言の哀しみ - 石牟礼道子の宇宙２】【死民と日常 - 私の水俣病闘争】等々、多くの渡辺さんの著書を刊行しており、今後も、現在熊本日日新聞に連載中の【小さきものの近代】続刊をはじめ渡辺さんの著書の刊行がしばらく続いていくものと思っていました。2021年に刊行された【肩書のない人生 - 渡辺京二発言集２】では、日本文学の主流から〈おっ外れている〉突発現象であった石牟礼道子と宮沢賢治という二人の文学者について本を書きたい、といったことをおっしゃっておられ、それもいつか弦書房で刊行されるものと期待していたのですが、残念なことでした。

▼ところでこの『肩書のない人生』では「石牟礼さんのような天才の仕事の手伝いができたことは幸運であった、それによって時間がとられたとか、自分の仕事がおろそかになったとかいうことは一切ない。一生のめぐりあわせで、幸せなことだった」という言葉があり、深く印象に刻まれました。改めましてここで渡辺さんのご冥福をお祈りいたします。

地方・小出版物のデータになります。綴じて保存してください。

honto
ネット通販で地方・小出版流通センター扱い
本がご購入いただけます。
honto.jp
hontoではお客様の読書スタイルにあわせて
電子書籍でも紙の本でもご購入でき、hontoポイントは
ネットでも書店でも使えて、貯められます。
地方・小出版流通センター扱いのご当地本もネットで
ご購入いただけます。
くわしくは honto.jp へアクセスください。